

陶芸の里
みやぎの文化財

第一集



宮崎町教育委員会

発刊のことば

わが町には古代より先人が住いし、その生活や各時代を物語る多くの遺産が残されております。これを保存し活用し、後世に伝えていくことが私たちの役割でありましょう。「古きをたずね、新しきを知る」のことわざどおり、歴史や伝統をぬきにして町政は語り得ません。

この度町内の文化財をみんなで知り、みんなで守って行く指針として、「みやざきの文化財」第一集の発刊をみるに至りましたことは、21世紀に向けた新たな町づくりにスタートした今、誠に意義深いものと考えます。今後第二集・第三集と刊行され、活用されることを切に願うものです。

発刊にかかわられた文化財保護委員の方々のご苦勞に対し、心から感謝を申し上げます。

平成4年2月

宮崎町長 大場隆也

発刊にあたって

獅子舞の音は六百数十年もの間、私どもの祖先によって受け継がれてきた宮崎の心です。また、東山遺跡の遺構や出土品からは、千年余も以前の、当時の時代や住んでいた人々の暮らしに心が動きます。

先人が営々と築いてきた文化遺産、そして自然の恵み、いま私たちはその恩恵に浴していることを忘れてはなりません。現代の急速なテンポでの様変わり、ともすると開発や新しい生活にだけ目が向けられて、忘却されがちです。

今回発刊いたします「みやざきの文化財」第一集、さらに第二集、第三集と刊行する計画で準備を進めておりますが、町民のみなさんに歴史遺産に目を向けていただき、この本が活用されますことを期待いたします。

刊行にあたりご苦勞いただきました文化財保護委員の方々に心からお礼を申し上げます。

平成4年2月

宮崎町教育委員会

教育長 山 本 善次郎

発刊にあたって

私たちの身のまわりには、先人の残された数多くの文化遺産があります。なかでも政治的・社会への進展を示す米泉古墳群、大化の改新による国郡制の実施を物語る東山遺跡、鎌倉幕府による地方統治の地頭制を示す倉持文書、豊臣秀吉の天下統一への朱印状が示すように、伊達政宗を第一陣とする奥羽平定のための宮崎城合戦などは、日本の歴史に重要な位置と役割を示すものでありましょう。このような史実の外、磁器が焼成された切込焼、魚取沼の鉄魚など有形・無形・埋蔵文化財、史跡・名勝、天然記念物等が存在しております。

これらを保護活用し、伝承して行くことが現代に生きる私どもの使命であると考えております。今後も二集・三集と継続して編さんしてまいります。町民のみなさんの文化財に対する関心と深いご理解を切にお願い致します。

平成4年2月

宮崎町文化財保護委員会

委員長 板垣剛夫

目 次

天然記念物	魚取沼と鉄魚の生息地	1
旧 跡	寒風沢番所跡	3
城 館	米 泉 館 跡	5
	宮 崎 館 跡 (古城)	6
	鳥 嶋 館 跡	7
	柳 沢 大 館 跡	8
神 社	延喜式内賀美石神社 (天王様)	9
	旧村社 熊野神社	11
	護国山 光明寺仁王堂	13
	旧村社 鳥屋ヶ崎八幡神社	15
寺 院	暮坪山 西光寺、馬頭観音堂	16
	蟠龍山 洞雲寺	18
	柳沢山 長泉院	20
	月桂山 香林寺	21
	大慈山 正眼庵	22
	巨嶽山 龍泉院	23
	鳥嶋山 大樹寺	24
	米府山 城泉院	25
遺 跡	大塚森古墳 (えびす森古墳)	26
	大黒森古墳	27
	米泉横穴古墳群	28

古 文 書	倉 持 文 書	29
	谷地森氏知行書	30
学 問	芦東山と「無刑録」	31
絵 画	絵 馬	33
	障壁画（天井画）	34
工 芸	切 込 焼	35
	宮 崎 音 頭	40
付 録	みやざきの文化財案内図	

ゆとり
魚取沼と天然記念物鉄魚の生息地



町の南西部、山形県との境界翁山の山腹にある魚取沼に、鉄魚が生息している。フナに似た魚でフナより尾ビレ、その他のビレが著しく伸長している。



色は普通煤褐色であるが時には白、赤、橙、黄、黒およびその斑点をもったものもある。

一見金魚に似ている。



魚取沼自然環境保全地域



昭和2年東北大学教授朴沢三三博士の調査研究により、昭和8年4月国の天然記念物に指定されている。

鉄魚の命名、成因についてはわからないが、深山に囲まれ遠く隔離された魚取沼に生息していることは、自然の結果であって人為の加えたものとは思われない。元来フナは変化性に富むもので地域により差異が認められる。鉄魚もまた自然の変化性によるものといわれている。

遠く隔離された場所で多数の魚が何代もの間、同族配合を重ねているうちに、ある因子によって生ずる自然の作用によるものといわれている。

寒風沢番所跡

寒風沢



番所とは、江戸時代に
 通行者、通行船舶などの
 荷物の検査、税の徴収を
 行った所である。

仙台藩では、寛永8年
 (1631)寒風沢に番所を
 おくと記録にある。

藩政時の番所と道路

- 凡例
- 国・郡境
 - ==== 主要道
 - 間道



寒風沢番所の取締り区域は、玉造郡境から軽井沢までであったが、田代と軽井沢に番所がおかれてからは、住吉、翁峠、吹越、大平に至る道筋と他領との御堺廻番区域、26里4丁（約100km）とあり特に重要物資（密馬・密石）の取締りを厳重に行った。そして番所の足軽・御境目横目がその任にあたった。

御番所は縦8間、横4間半と、足軽、御境目横目の屋敷13軒あったといわれている。しかし元禄末（1700年頃）寒風沢からの山越通行はほとんど絶えたので御留道となった。ようやく明和の初年（1764）から再び



通行を許したが交通量は多くなかったといわれている。

現在、番所跡の杉の大木と、側の山神社から昔をしのぶことができる。

番所跡側の山神社



元禄6年（1693）の銘が入っている「わに口」



元禄12年（1699）の銘が入っている「おはらい鉢」

参考資料 安永風土記、御用留帳写。



米泉館は米泉古城ともいわれ、城の土塁、空堀が残存し、本丸跡、二の丸跡、三の丸跡があったと推定される。城の北側に円錐の先を切ったような物見山遺跡があり、城跡からは、須恵器、甗土師器が出土しているので、古代からの城跡と思われる。

天正末（1590年頃）大崎氏の家臣、笠原伊勢の子、権右衛門の居館といわれている。

仙台古城書上には東西96間（約170m）南北70間（約120m）とあり大規模な館であったことがわかる。

現在は、中新田町の上水道貯水槽があり、館山公園となっている。

宮崎館（古城）

麓



古戦場
宮崎館（古城）



田川と烏川の合流する熊野様丘陵の突端に築かれた、中世の山城である。竪42間（約75m）、横40間（約72m）とあり、中新田城、名生城と共に大崎領の三大名城で、中でも宮崎館は自然の要害の地にあった。

天正19年6月（1591）時の城主笠原民部を主力とする笠原党三千余がたてこもり、秀吉の奥州統括に反抗した。6月24日、秀吉の命を受けた政宗が一万余の大軍を率いて攻略を開始し、二日間の激戦の結果落城した。すなわち宮崎城合戦である。この合戦後、大崎氏支配から伊達氏支配に、世の中は中世から近世へと、大きく変遷するのである。

参考文献 安永風土記、仙台領古城書上、仙台史料



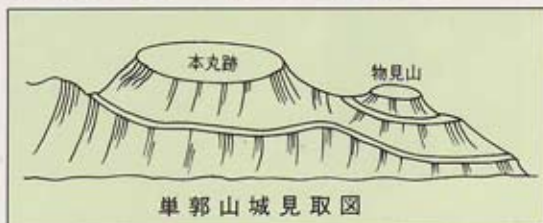
鳥嶋の丘陵突端部に築かれた中世の多郭式城郭で、土塁、堀切などから二の丸、三の丸跡がみられる。安永風土記には南北45間（約80m）東西9間（約16m）とある。

「封内風土記」には、一栗弾正（玉造郡一栗城主）の一族、大崎家臣北郷右馬允（又は鳥嶋右馬丞）の古城と記されている。



「登米郡史」には、天正19年（1591）大崎葛西一揆のとき、ここを逃れ、佐沼城に拠り、大将として伊達軍に抗し討死、また桃生郡深谷において斬殺されたとも記されている。

参考資料 安永風土記、封内風土記、登米郡史



柳沢丘陵の中央部に築かれた中世の山城である。堀も深く、本丸には本陣と思われる建物の跡を示す土塁が今なお残っていて、本丸西の丘陵（太鼓森）にも城郭遺構がみられる。古城書上には縦30間（約54m）横70間（約130m）、規模の大きさは郡内第一位である。館主は大崎家臣柳沢紀伊、一近江～七郎（後伊豆）～備前の居館とある。





賀美石神社は、谷地森本郷に鎮座されてあった。平安時代延喜5年(927)に完成した「延喜式」50巻の中の神名帳にのっている延喜式神社又は式内社であり、8世紀年代の古い神社で、陸奥の国司による奉幣社である。現在の加美郡内延喜式内社は、色麻町の伊達神社、小野田町の飯豊神社、宮崎町の賀美石神社の三社である。



安永風土記には南北26間(約46m)東西25間(約45m)とあり、実に壮嚴なものであったと想像される。

現在、この旧社地は8m四方に縮少され、その中央の神座石が大昔を語るのみである。



賀美石神社は大正4年(1915)当時の谷地森村内の四社(式内社賀美石神社)(八坂神社)(神明社)(八幡神社)を根岸の丘上にある八坂神社境内に合祀して、通称天王様とよんでいる。

数社を合祀することは、明治政府の訓令によるもので、八坂神社に合祀したのは、この地が神域として最も望ましい地で、村民一同この地を強く望んだといわれている。

祭神は賀美石神社が猿田彦命、八坂神社が素戔鳴尊、神明社が天照皇大神、八幡神社が応神天皇である。現宮司は大山 孝師である。





源頼朝奥州平定後、東北の地（蝦夷地）に近畿・中国の農民を移住し開拓させたので、宮崎や鳴瀬川流域は、紀州からの移民が多かったという。

これらの開拓農民が故郷の氏神を祀るため紀州の本社から御分霊を受け元応2年（1319）社司藤原重密が熊野神社として麓に祀ったといわれている。

大崎氏時代、大崎五郡の総鎮守一の宮の称号を受け神領を寄進される。文禄2年（1592）羽黒派の修験道となる。承応年間（1652～54）石母田氏より神領を寄進される。明治3年（1870）修験道から神道に分離し現在にいたっている。

祭神はイザナキノ尊、イザナミノ尊である。現宮司は宮崎萬喜子師である。

神事 御潮垢離

紀州の本社では、御神体を社司藤原重密に授け海路により下向させた。

途中常陸沖で暴風にあい漂流し、数日後桃生郡鳴瀬町浜市に上陸、その後、鳴瀬川をさかのぼって現在地に祀られたという歴史によるもので、当地に祀られてから23年目毎、（いつからか不明だが今は21年目毎）に行われる。平成3年4月に第21回目の御潮垢離の神事がとり行われた。

神輿、御神体が、鳴瀬町浜市鹿野八十郎氏（御神体を発見し社司と共に現在地に祀ってくれた人）宅に渡御、海中に入り潮水を御神体に灌ぐ（灌潮の儀）を行う。

神輿の渡御道筋



護国山光明寺大日堂(仁王様)

北川内



延暦20年（802）坂上田村麻呂はこの地の蝦夷を平定、虎取川上流の嶽ヶ森ツキノノリに素盞鳴尊を祀るという。

嘉祥2年（849）慈覚大師この地に大日如来をきざみ祀る。

永正18年（1521）大旦那笠原兵部少輔兼国護国山光明寺建立、施主尾形豊前守（棟札に）

天文22年（1544）今の地に移転再建立、これより如来堂村を北川村と改める。大旦那笠原近江守正治、施主尾形河内守治助（棟札に）

宝永元年（1704）素盞鳴尊を祭神とする熊野堂（奥の院）を建立。

明和元年（1764）堂宇再建、今日に至る。（棟札に）

明治5年（1872）神仏分離の令により熊野神社（別名仁王護国神社）



密 迹 力 士



金 剛 力 士

として祀られる。

仁王堂には二体の仁王様が安置されている。

一体は那羅延金剛（金剛力士）、一体は密迹金剛（密迹力士）である。

高さ 196 cm、胸囲 120 cm
一本の木でなく組み合せ木像、作者・制作年代は不明、由来についても諸説がある。

祭神は熊野堂（奥の院）に素盞鳴尊、仁王堂に大日如来と仁王尊

現宮司は宮崎萬喜子師である。

郡内三十三観音 三十一番

「山道を

たどりてここに

北川や

ふかきめぐみを

くみてしるなん」

参考資料 安永風土記

棟札



景雲3年（706）行基菩薩が諸国修行の折、当地に阿弥陀如来像を安置し、更に石清水八幡大菩薩を勧請すると伝えられている。天喜4年（1056）鎮守府將軍源義家が東北追討の途上、当社において山籠り17日間の御祈願靈験あらたかだったことから以来弓八幡大神宮といわれている。応永4年（1377）火災になり現在地に堂宇を建てる。



明治のはじめ、神仏分離と合祀のすすめにより、小泉の深山神社、鳥嶋の鹿島神社を合祀し現在にいたっている。現宮司は大山 孝師である。

参考資料 文化14年の縁起録。



御本尊



旧寺場の供養塔

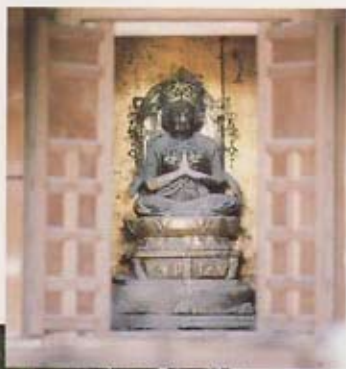
嘉祥年間（848～850）天台宗第三祖慈覚大師円仁が東北巡錫の折、西川北細工田西に暮坪山西光寺を開山し、また、自ら馬頭観音像を彫刻し、堂宇を建てて安置したと伝えられている。

寛正4年（1463）仙台市元寺小路成就山満願寺亮洞法印を中興の祖となすとあるので、それ以前は幾年か寺の灯が消えていたと思われる。

慶長年間（1600年前後）火災や山津波に見舞われ現在地に移転する。

本尊は阿弥陀如来である。

現住職は三十六世太田義慶師である。



観音堂の本尊は、慈覚大師の作といわれる馬頭観音である。



堂宇は方三間、向拝一間、和風の強い（禪宗様式を加味）様式で[△]三手先斗組が見事である。文政12年（1819）西光寺二十世堅者法印中全代本堂建立、普請主立は切込検断喜平太、棟梁は中新田の角田荘吉・荘六・三浦平右衛門外九名と棟札に記されている。

郡内三十三観音四番

「後の世をかけてぞたのむ西光寺ふかき願のかのふことの葉」

参考資料 安永風土記、社寺明細帳、棟札。



応永元年（1394）山形市半郷、解大山安養寺二世舟淵玄鑑和尚の開山と云う。また応永元年大崎義直公の開基ともいわれている。

寛正年間（1460～）岩手県花巻市から当町鳥屋ヶ崎に移転する。

天文元年（1532）道城羽貫沢に移転し、大崎義直公の牌寺となる。

開基大崎義直の墓といわれる上円下方墳の塚や、経筒が出土した経塚が、鳥屋ヶ崎の山林内にある。

天正19年（1591）大崎氏没落以後、寺は荒廃したが、次にこの地を支配した牧野氏、古内氏の外護を得て復興している。

洞雲寺は平成6年には開創600年になり、曹洞宗の寺院としては県下有数の古刹である。歴代の住職は26ヶ寺もの末寺を各地に開山し、加美郡の本寺として重きをなした。現在の堂宇、本尊像は宝暦元年（1751）

二十四世活堂瑞龍代に造立され、大正10年（1921）三十四世王璘文隆代に道城羽貫沢より現在地東町福現寺跡（福現寺は石母田氏の菩提寺、所替と同時に高清水に移転）に移転し今日に至っている。

本尊は釈迦牟尼佛である。

現住職は三十七世田崎義章師である。



境内の延命地藏様

境内の一面に地藏堂があり、延命地藏尊が祀られている。県内百八地藏尊霊場めぐりの第五十番になっている。石母田氏時代に開田、用水路、町割が完成した時、家臣、町人の発願により建立されたものであり、蓮台の基壇から七尺余もある石仏座像である。

郡内三十三観音二番

「春々と札の内ものとうければ
こころ仏のつかいなりけり」

宮崎の開拓に尽した殿様の墓所



石母田家墓所



古内家墓所

曹洞宗 柳沢山長泉院

柳 沢



応永18年（1411）洞雲寺六世月泉桂林の開山である。開基は不明。

本尊は聖観音である。

現住職は三十七世田崎義章師である。

郡内三十三観音 三十二番

「柳沢やみどりの草も末ながく
げにも仏のむすびなりけり」

参考資料 安永風土記、社寺明細帳。



お姫様の写経の一部



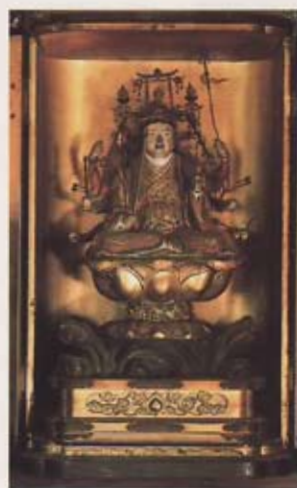
片平大和の墓

嶽翁宗悦の開山で、谷地森地頭片平大和親綱が天正年中（1573～）伊達郡片平村（福島県）から移り中興開基となる。

後年堂宇が全焼したので天明7年（1787）領主片平八蔵が再建したと旧記にある。片平氏のお姫様が大般若経600巻、妙法蓮華経8巻を写経したものが現存している。本尊は釈迦如来である。

現住職は二十二世千葉昌雄師である。

参考資料 安永風土記
仙台郷土史年表
社寺明細帳



正眼庵の弁天様

芝多氏が伊達藩士として村田にいたとき宝永2年(1705)四代常春の開基、仙台市大年寺四世鳳山の開山といわれている。

慶応2年(1866)十一代常質、片平氏と所替となり谷地森根岸に移住すると共に、正眼庵もここに移した。

住職は芝多家当主がなっていたが十四代常正氏歿後、香林寺住職千葉昌雄師がつとめる。

本尊は釈尊である。なお、同庵には芝多家の守神弁天様も安置されている。現在芝多家中の人々は弁天講をつくっている。

参考資料 芝多家系譜



境内の地藏様

天正二年（1574）洞雲寺第十六世天初秀浦の開山である。開基は不明。

寛永年中（1624～）中島の板垣藏之丞が中興開基となる。本尊は聖観音。現住職は十三世佐々木珠山師である。

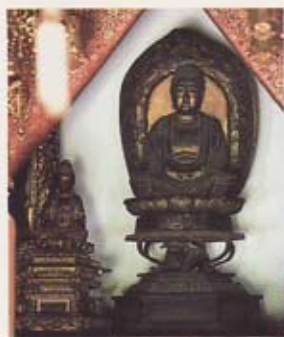
郡内三十三観音 十二番

「あめ土のやはらぐ中に親と子の
たのみはつきの小泉の寺」



応永22年（1415）大崎家臣鳥嶋城主北郷右馬允の開基、洞雲寺八世盛室祖隆の開山といわれている。最初は寺山という所にあったのを第三世興隆和尚の代に現在地に移した。その年月は不明である。本尊は阿弥陀如来である。

現住職は二十九世天野宏雄師である。



子持観音様

嘉吉元年（1441）洞雲寺十世富天慈泉の開山である。

本尊は釈迦如来で、本堂は明和3年（1766）の建立で、現在の本堂は昭和43年に新築されたものである。

境内に石造りの子持観音像が祀られている。安産の神として信仰されているが、普通の観音様と異なり子持ち観音に姿を変えたマリア観音ともいわれている。

現住職は三十世高橋安起師である。

郡内三十三観音 二十八番

「くにつかみあらんかぎりは米泉

御法はつきぬしるべなりけり」

参考資料 安永風土記
社寺明細帳

大塚森古墳(えびす森古墳)

米 泉



米泉小池裏の平原に、高さ11m 径48m、海拔57.3m にあり、大崎地方における最大にして最古の中期形式の円墳である。

この古墳こそ、郷土にはじめて成立した政治権力の象徴を

示すものである。

基底の周りを掘でめぐらし、墳丘の表面を河原石でおおった、堂々たる王者の貫禄を示している。いかに絶大な権力と富をもった首長が出現していたものか、現在まで発掘調査が行われないので、その構造、副葬品など、文化的な内容はわからない。

参考文献 安永風土記





▲大黒様



米泉集落の背後にゆるい丘陵（北原圃）があり、その東南の突端部を俗に大黒森と呼んでいる。大黒森には12の古墳群が集中しており、中でも代表的なものが大黒森古墳である。

墳径約38mの円墳である。いつの頃からか墳丘に大黒

様が祀られている。

なお、倉持文書に大黒屋敷という記述があるので、近くに倉持氏の屋敷があったと思われる。



参考文献 安永風土記
倉持文書



昭和46年8月、建設業者が雑木林を造成中に、横穴三基が露見したので、町が中心となって発掘調査を進めた。三基のうち二基は破壊され現在一基が保存されている。

玄室から羨道部の全面に礫石が敷いてあり、合掌形の玄室構造は他に類を見ない特徴をもっている。

土師器、須恵器をはじめ、人骨など数多く出土しているので8世紀前半のものと思われる。



参考文献

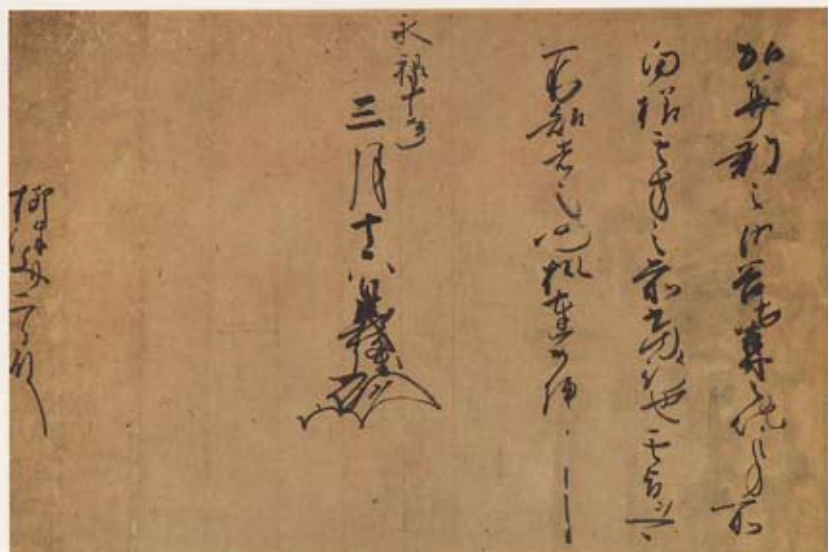
横穴古墳発掘調査報告書



倉持文書は当町における最も古い文書である。倉持左衛門尉忠行は足利尊氏の祖父家時の家人で、文永3年（1266）家時の領地賀美郡穀積郷（米泉）の地頭代職として下向した。それから約130年米泉を中心にした一帯は倉持氏の領地であった。

倉持氏一族の居所は、米泉大黒森の西方と、羽場との境小池屋敷であったと推測される。

文書は所領地確認の下文、安堵状、譲状、軍勢催促状など28通が保存されている。上の写真は足利家時から倉持左衛門尉忠行にあてた下文である。なお地名は、下文で穀積郷、貞和3年（1347）の譲状では米積とあり、その後現在の米泉となったと思われる。



大崎氏時代柳沢文二郎事谷地森主膳（柳沢大館館主柳沢備前の二男）は、谷地森館主となって谷地森一帯を領していた。宮崎城合戦後羽州山形に逃れたといわれている。

末えいは伊達氏に仕え古川稲葉の領主となったと伝えられている。

この文書は、大崎義隆から柳沢文二郎に与えた知行書（土地・財産の直接支配権）で、その土地の領主の変遷を知る資料となる。谷

地森の中世末は谷地森氏、近世は片平氏、芝多氏（版籍奉還）となる。

柳沢文二郎殿

永禄十年三月十六日

義隆（花押）

加美郡の内谷地森の事、所同様、其の方の前、当行なう也、其旨を承知すべき者也、仍て執達如件

芦 東山先生と「無刑録」



東山先生肖像
東山先生肖像

芦 東山は元禄9年(1696)現岩手県東磐井郡大東町洪民に生れ、幼少時代から儒学者桃井素忠、吉田需軒、田辺希賢、三宅尚斎などに儒学、医学、兵学を学んだ。

人並みはずれた才能と努力が認められ、仙台藩の儒官として五代藩主伊達吉村公に仕えた。

享保6年(1721)26歳の時、藩主の供をして江戸に行く。後、室鳩巢(将軍吉宗の儒官)の門

下生となる。

この時、室鳩巢から刑法書の執筆を依頼されたといわれている。

元文3年(1738)仙台藩校内の学問上の対立から、「宮崎の石母田家に閉門仰付」となり、現宮崎町下小路町宮住宅地に幽閉される。これより宮崎に20年間、高清水に4年(石母田家所替の折東山も移謫)計24年間の幽閉時代に入る。

この間世界に誇れる「無刑録」を執筆する。

宝暦11年(1761)赦免され故郷に帰る。65歳。

安政5年(1776)81歳で歿する。



芦 東山先生幽居の地



岩手県東磐井郡大東町 芦東山先生記念館蔵

「無刑録」は、芦東山宮崎幽閉中、血のにじむような努力の結果宝暦元年（1751）17年の歳月をかけて完成する。

「無刑録」とは、現在の刑法にあたるものであるが「無刑」の示す通り、刑罰のない平和な理想の世の中を願って書いたといわれている。しかし、「無刑録」が世にでたのは明治10年（1877）であり、芦東山の歿後100年たってからである。



元老院蔵版

絵 馬



観音様乗馬像 (年代不明) 馬頭観音堂

板に様々な絵を描き、寺社に奉納したものが絵馬である。宝暦年間(1751～)以降多くなり明治の後半から少なくなる。絵馬に描かれた画題は多種類で、動物、祈願、物語、学問、芸能、吉祥、風俗図などである。馬は神の使いとされ馬を題材としたものが多い。



源平合戦図 文久元年(1861) 天満宮(小泉)

障 壁 画(天井画)

安土・桃山時代(1573~1615)進取に富んだ活気ある時代が展開する。この気風は絵画にもあらわれ金泊、彩色による大画面の隆盛をみる。

やがて地方にも普及し、城郭、邸宅、寺院などの壁面、ふすま、屏風、天井などに雄大な絵が描かれた。画題

は花鳥、山水、風俗、幾何模様など種々雑多であるが、中でも花鳥図が最も多い。



画題 花鳥模様(絵師・年代不明)馬頭観音堂



画題 花鳥図(絵師・年代不明)香林寺

切 込 焼

切 込



天保六年の「湯呑」銘湯倉製
(仙台市博物館蔵)

切込焼の最盛期は弘化・嘉永・安政頃（1844～1858）までの15年間で、陶工山下吉蔵の時代である。西山・中山・東山に連室式登窯を築き、仙台藩直営の藩窯と民窯も栄えた。

「みちのく」に咲いた土と火の芸術である。

切込焼の発祥については、政宗公時代説、三代綱宗公の寛文年間説、その他諸説はあるが、文献、窯跡、伝世品の三つとも明らかなのは、天保6年（1835）である。

この頃焼かれた切込焼は、東北地方最古の磁器で日本陶器史上特記すべきものであり、本町はもとより東北の誇りである。



嘉永二年奉納「花瓶」銘棟梁山下吉蔵外（洞雲寺蔵）

切込焼の美

- 1 簡素、素朴である。色絵もあるが、一般に呉須による飾り気のない大胆な絵が多い。
- 2 李朝風の純白磁の強いものもあるが、多くは底の方にほのかなうす鉛色の感じられる柔かい白磁系のもので、「わび」とか「さび」とかの感が十分味わえる。
- 3 ラッキョ形(ラッキョウ)の壺にみられるようにドッシリとした重量感がある。



「染付菊文らっきょう徳利」銘なし(個人蔵)

切込焼の美



「染付祥瑞手山水紋瓢型徳利」
銘湯倉製 ユノクラ世(個人蔵)



「染付菊文火入」銘なし(個人蔵)



「染付松に蛸唐草文長四」銘なし(個人蔵)



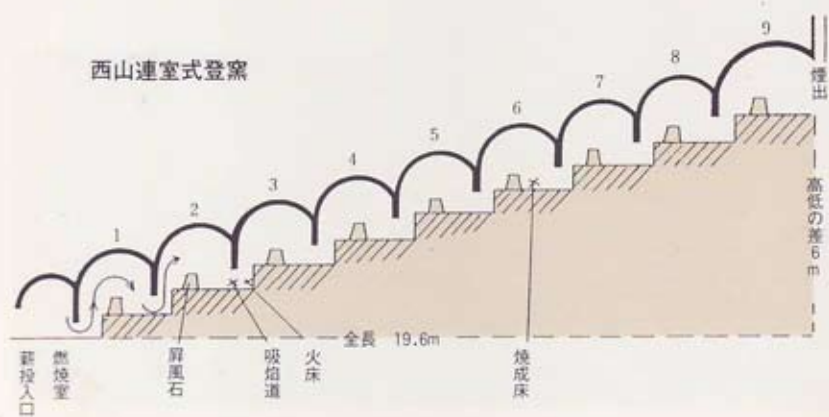
「染付山水紋蓋付香炉」
大正11年製(個人蔵)



「八卦紋蓋付飯茶碗」
銘なし(個人蔵)

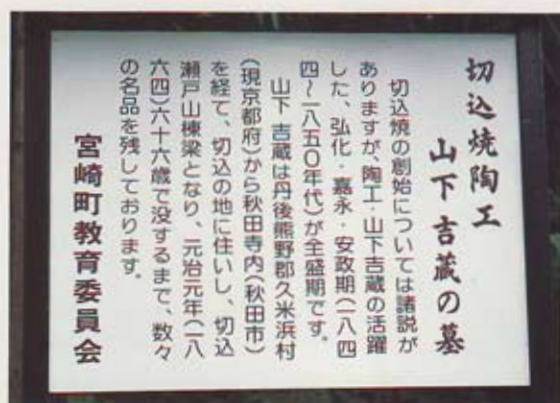


切込焼窯跡の全景



切込焼が弘化・嘉永・安政にかけて全盛期を迎えたのは、名工山下吉蔵外、山下十七蔵、山田豊三、画聖梅関、絵師幽谷齋などの来町と、恵比寿屋徳蔵（現藤崎デパート）や仙台藩

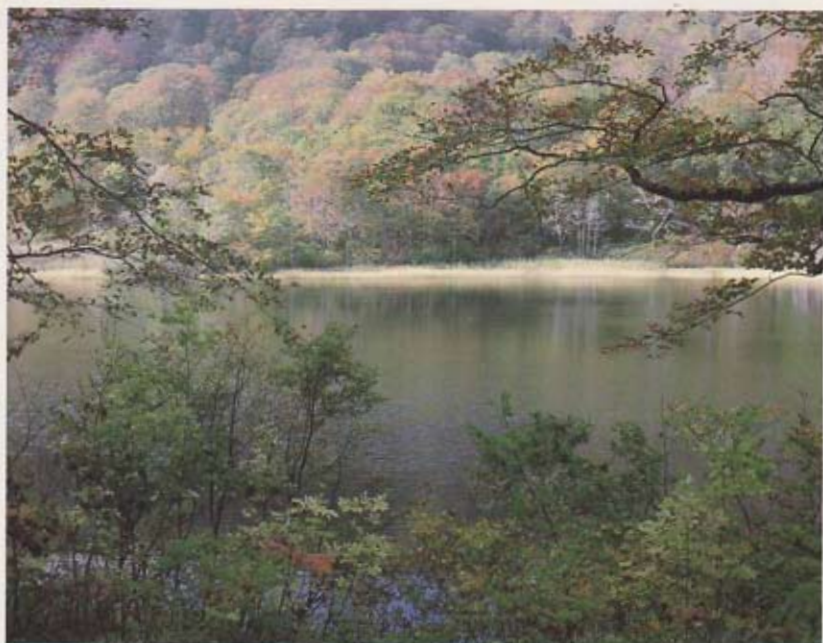
の援助によるところが大きかった。天保末の頃、職工15~16人、人夫100余人と記録にある。また、台の原や、色麻の平沢、大和の宮床などにも切込系の窯跡がある。



参考資料

- 千葉家文書（築窯願）
- 絵野家文書（御用留書）
- 伊達家文書（安政4年春北方御郡日誌）
- 西山窯跡発掘調査報告書（東北大）
- 中山窯跡発掘調査報告書（宮崎町）
- 他 切込焼研究家著書





沼取魚の秋初

宮崎音頭

＼さかる宮崎 たからの田川 照る日くもる日
照る日くもる日 木も太る

(ハア宮崎ほんとによいとこ)

＼館の山から 青田を見れば どこが涯やら
どこが涯やら 境やら

＼流れ行くかよ 田ぜきの水は いとしあなたの
いとしあなたの 田のくろに

＼田川十五も有る橋なれど あいに行く橋
あいに行く橋 ただ一つ

＼せきの清水に その影うつし 誰をなでしこ
誰をなでしこ 咲いて待つ

＼思い出させて 古城あたり 鳴いて行くやら
鳴いて行くやら ほととぎす

＼月の田川の 鳥屋崎橋に 立てば瀬音も
立てば瀬音も さえざえと

＼行こか澄川 湯川のほとり もみじ色増す
もみじ色増す 秋月和

＼駒は萩ゆえ まるまるふとる 加美の宮崎
加美の宮崎 田に山に

＼風のまにまに 炭焼く煙り 娘ごころに
娘ごころに 似てなびく



文化財愛護シンボルマーク

文化財という民族の遺産を過去、現在
未来にわたり永遠に伝承していくとい
う愛護精神を象徴したものである。

■編集協力者

宮崎町文化財保護委員会

委員長 板垣 剛 夫
副委員長 猪股 哲 夫 早坂 巖
 庄司 清 一 土田 二 郎

事務局 宮崎町公民館

館 長 高橋 栄 輝
写真撮影 今藤 写真館

みやざきの文化財

平成4年2月20日 印刷

平成4年3月1日 発行

発行者 宮崎町教育委員会
宮城県加美郡宮崎町宮崎字屋敷1番52番

印刷 (有)中村印刷所
宮城県加美郡中新田町字南町45

